©2022 YHAL, YITP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所　湯川記念館史料室

1966.12.6
刊）中外日報（日刊）（明治30年10月6日第三種郵便物認可）創刊71年

一科学者としての人生観 ㊤

湯川秀樹

講演する湯川博士

私は物理学者である。私は小さい時には学者になろうと思った。そう思う前は何も思っていなかった。自分はいったい何になるかを考えなかった。そういう時機があった。その前に自分は自分であると考えた。私は兄弟は沢山あり三つ上の兄貴はいろいろなことを知っていた。議論しても、こちらの議論はいかん、むこうが正しいとわかっていってもコンチキショウと思い、つい手を出してしまう。そして自分であることに気がつく。

中学校へ入ったころ、自意識はわりあいはっきりしてきた。その結果としては、自分は孤独だと思うようになった。私たち人間はこのように生まれて来ようとはせずに気がついたらこうだったと気がつく。これは自分と自分でないもの自分がおかれている世界と自分とを区別するほかに自分と遷った、それでまた似たほかの人がいることもはっきりするようになる。一遍にそうなるのか、だんだんそうなるのかわからぬ。結果的にそうなる。自分は多くの人たちと一緒に生まれ合わせたと感じるのがあたりまえである。

私は科学者京都会議の世話人をし、声明を出そうとした。その声明は格調の高いものにしようとした。「この世に人類の一員として生まれ合わせた」という文にし、それを英訳して外国にも出そうとした。ところで「生まれ合わせ」というのを、どういう英語をあてはめるか苦労した。京都に住みついてこられた人であるなら「生まれ合わせた」という表現は説明はしなくてもよい。しかしこの「生まれ合わせた」ということの理解は中国人にも東洋人にもむつかしいかもしれません。仏教発祥の地インドの人にもわかりにくいと思う。

私は二つ悪いクセができた。この悪いクセはある年配になると出てきた。一つはいろいろな人にあうといろいろな話を訊く。小話をきくのではなくて専門のことを訊くので、私は人を困らせている。自分の専門は全部知っているとは限らないのである。私はその人の専門のことを訊いて、その人を困らすという悪いクセをもっている。

もう一つは、自分は話をしていても脱線してしまう。京都大学の学生に物理の講義をしていて話が脱線してしまうことがよくある。

私は多くの人たちと一緒にこの世に生まれ合わせた。その中でこの自分はどういう生き方をするべきかと答えるのが人生である。こういう問いを出すこと自体が人生観をのべることである。私は結果において科学者となった。科学者であって人間でないというのではない。科学者は職業ではないと思う。天職というなら別だが、自分の生き方が天職であるかどうかはわからないが、少なくとも私は一致している。このことについては皆様が考えて飛躍していることもあるかもしれないし、人間として共通なこともあるだろうと思う。

人生観と申しますと「人生観は世界観だ」と哲学者はいう。私は科学者で哲学と宗教について、かれこれというのは大それたことであるといいながら、それに近いことをいう。私は「科学者のクセに」といわれたことがよくあるかもしれません。これは自分がおかれている世界に気がつくということでもある。

根源的な〝未知〟へ挑む
創造的人間性のはたらき

人間の創造性という問題に興味をもち、最近「創造的人間性」というのを出した。創造的人間とは、創造とは何かというむつかしい問題がある。今まで誰もわからなかったことをわからそうとする。何かの創造性をわからそうとする。年がら年中そう思っていても非常にえらい学者でもそう何度も成功するわけではない。創造性と世界観とは密接に関連している。

開放的世界観というがこの開いているのは三重に開かれたということである。第一は外にむかって開かれている。これは自然科学者は自然界を相手にしている。これらにはすっかりわかっているのではなく未知なものがある。その外、科学者は宇宙や物質の根源をつきとめる。素粒子は物質やエネルギーの最小の単位である。しかし、数々の素粒子が発見されており、これが最初で最後のものだと思えなくなった。

私は中間子によって物質の根源はだいたいわかると思った。中間子によって、私は物質の奥底を解明する鍵をにぎったと考えたのは大体あたっていた。それから十年、二十年、三十年とたつうちに様子がかわった。近頃みつかったものをいえというと何種類あるかはっきりいえない。とにかく多数の素粒子があるという状況である。第二には、根源的な意味において未知なるものがある。われわれは何かを知っているから未知なるものがある。わかったことがふえるとともに未知なるものもふえる。いずれにしても知っていることがふえ、わからんことは何か、何がわからんのかを追求して行く。自分のことは自分がよく知っているというが、実際はよく知っていないでとんでもないことをする。

なにか意識的に知っている。知らんという意識があることは知っていることである。

―本稿は、大谷婦人会館で催された大谷大学仏青創立記念講演会での講演要旨、なお文中明瞭をかく点につきましては記者に責任があります　　文責在記者

c073-001-039

教界雑記

c073-001-040